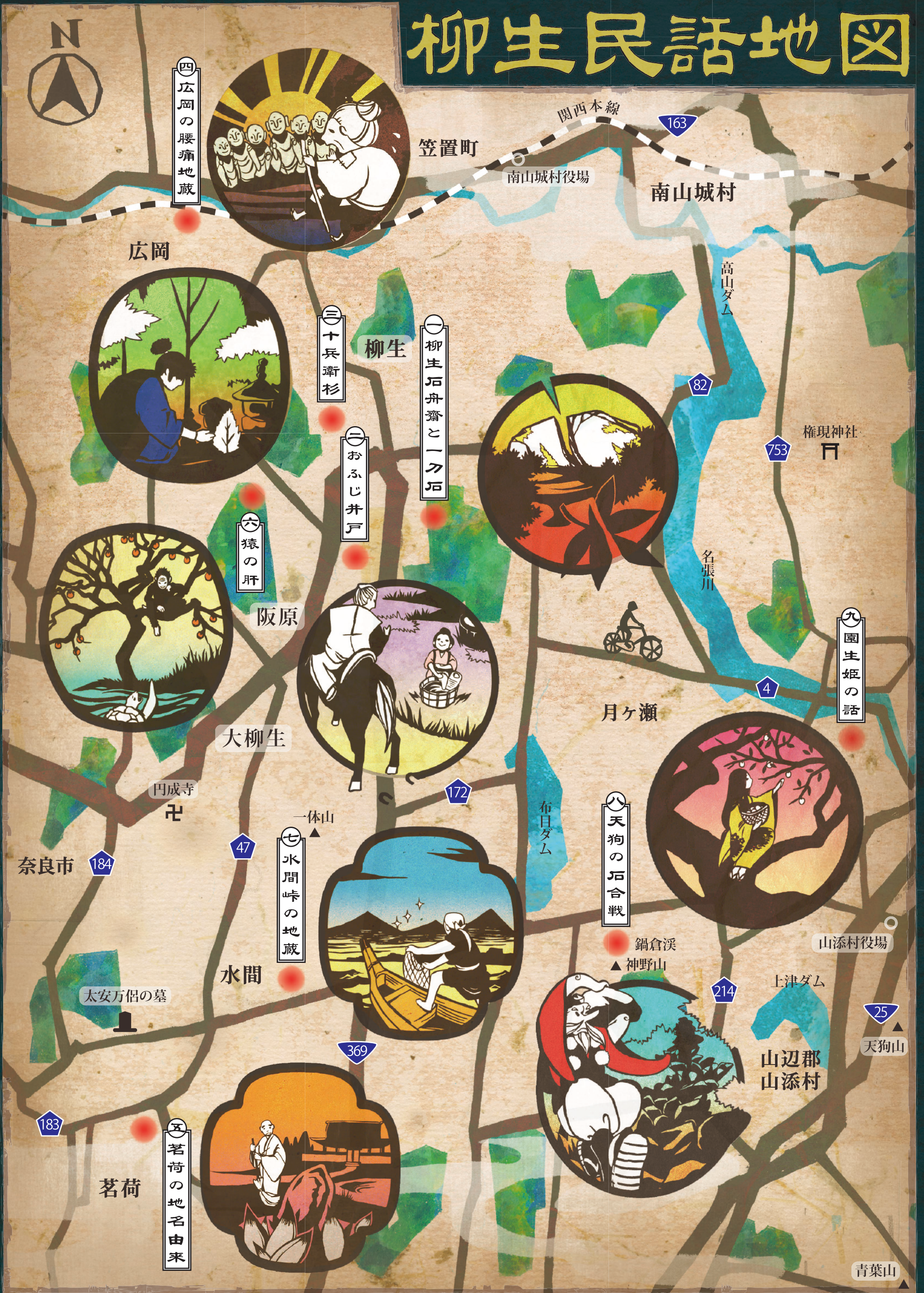


柳生民話地図



地図の民話スポットで 声に出して読もう！

① 柳生石舟斎と一刀石

資料 (1)

むかし、柳生石舟斎は、磐立神社のあたりで、毎日剣の修行をしてたんですよ。そしたら、ある晩、天狗が出てきてな、石舟斎に襲いかかってん。石舟斎は、その天狗を「やあつ」と一刀のもとに切りすてたんや。ところがな、明るる日行ってみたら、天狗おらん。そこにあつた大きな石がまつぶたつに切れてん。ほんで、その石を一刀石で呼ぶようになってん。

今でも、その石に、天狗のつけた傷あとが残ってるねん。

② おふじ井戸

資料 (1)、(3)

柳生宗矩は、春日大社の宮司のこへ、よう開き打ちにいったんや。

ある日、宗矩が、いつものように馬に乗って、かえりばさ峠越えて阪原村まで来たらな、道端の井戸で、娘がひとり洗濯をしてんで。宗矩は、いきなり馬とめて、

「これこれ、娘、その桶の波の数はいくつあるか」て聞かはってん。

娘はすぐに、

「はい、二十一波でございます」て答えてん。波(な・み)、七と三で、ひちさん二十一やろ。ほんで二十一波と答えたわけや。ほな、こんどは娘が、

「では、お殿様、柳生から奈良まで馬の足跡はいくつございますか」て尋ね返してん。宗矩は答えられへんかってんで。ほんで、(かしこい娘やなあ)て感心してしまわはってん。

この娘が宗矩の側室になったおふじの方や。柳生家の菩提寺、芳徳寺の列室和尚のおかあさんや。村の人は、この井戸を「おふじ井戸」て呼んで、今もこんな湧き水があふれてんねん。

おふじが馬に乗って宗矩のこへ嫁入りする時、母親が、阪原村と柳生村の間の峠まで見送って、別れを惜しんだんや。そこを今も「かえりばさ峠」て呼んでるねん。

③ 十兵衛杉

資料 (1)

むかしは、柳生家のお墓は中宮寺にあつたんや。

あるとき、十兵衛は、江戸に向けて剣の修行に行くことにしてんで。ほんで、出かけるときに、(いつ帰ってこられるやわからへん。とないなるやわからへん)と思つて、先祖のお墓にお参りして、杉の木を植えて拝んだんやて。

それが大きいなって、十兵衛杉て呼ばれるようになってんけど、あるとき雷が落ちてね、枯れてしもつたんやて。

原話資料 (1) 進藤秀樹・竹原威滋・丸山顯徳編『奈良市民間説話調査報告書』(奈良教育大学刊)

(2) 阿部 奈南・進藤秀樹・垣崎仁志編『月ヶ瀬村の伝説と世間話』(言語・研究と資料 62号)

(3) 島田 芳夫編『大和の伝説覚え書』(稿本)

(4) 高田十郎編『大和の伝説増補版』(大和史蹟研究会刊)

再 話 村上 都

④ 広岡の腰痛地蔵

資料 (1)

むかし、広岡町に普光寺というお寺があつてん。

そこに六体地蔵さんがあつて、腰痛地蔵て呼ばれてるねん。お参りしたら腰痛がなくなるいうてむかしの人はようお参りに行かはってんで。

あるとき、ひとりのおばあさんが、きんちゃくに白のお米をちよつと入れて、杖ついてお参りに行かはってん。毎日毎日行つて拝んだけど、なかなか良うならへん。

ある日、おばあさんは、

「私はもう腰も痛いし、生きてても用がない。はよお迎えに来てください」いうて拝みはってん。そしたら、六体地蔵さんがあらわれて、

「わかった。明日さつそく迎えにきてやる」ていわはってんで。おばあさん、びっくりして、

「明日のこんどのそのこんどで結構です」ていうてん。ほな六体地蔵さんは、

「わかった。明日のこんどのそのこんどに迎えに来てやる」ていわはってん。おばあさん、あわてて、

「明日のこんどのそのこんど、もひとつこんどのそのこんど、またもひとつこんどのそのこんど」て、くり返しくり返しく拝んで、帰っていつてんで。

この六体地蔵さん、ようきいてくれはるそや。

⑤ 茗荷の地名由来

資料 (1)

むかし、あるお寺に、和尚さんと小僧さんがいててんで。小僧さんは、物覚えが悪うて、お経を教えてもろても何を教えてもろても、なあんにも覚えへんかってん。

そのうち、小僧さん、病気になるて死んでしもつてん。そしたら、お墓のまわりに、何かの芽がよけ生えて来てん。村の人は、「妙なもんが生えてきた」いうので、その芽を「茗荷」いう名前にしたんやて。そやから、茗荷食べたら、物忘れするんや。茗荷よけ生えるから、ここを茗荷町いうようになつてんで。

⑥ 猿の肝

資料 (3)

あるとき、竜宮城の乙姫さんが、

「猿の肝を食べてみたい」ていわはってん。みなが「猿てどこにおるんや」いうて困つてたら、阪原村から小間使いに来てたひらめが、

「私の村に、市窪猿いうりっぱな猿がおります」いうてん。

そこで、阪原村に竜宮の宮湖を作つて、阪原村と竜宮城をつなぐ道を作つたんや。ほんで、年寄りの亀が、市窪猿を竜宮城までつれて来ることになつてん。

亀は、新しい道のおかげで、あつというまに阪原村に着いてんで。ほんで、川におつた亀に道教えてもろて市窪山登つていつてん。ほしたら、大きな柿の木の上で、市窪猿が居眠りしてたんや。亀は、

「今夜、竜宮城で、新しい道ができたお祝いをしますねん。私と一緒に来てください」いうてん。市窪猿は喜んで、亀の背中に乗つて竜宮城に行つてんで。

竜宮城に着いたら、ひらめがそつと市窪猿に近づいて、

「おまえは、今晚、乙姫さんに肝食べられることになつてんねん」ていうてん。

それ聞いた市窪猿は、竜宮城の奥の本殿の前まで来たとき、

「おれ、えらいことしてしもつた。今日は天気がよかったんで、肝を洗うて柿の木にほしてたんや。その肝そのまま置いてきてしもつた」いうてん。

亀、あわてて市窪猿を乗せて肝を取りにもどつてんで。阪原村に着いて、柿の木の下まで来ると、市窪猿は、木の上にするすつと登つていつてん。亀が木の下でなんぼ待つても、市窪猿下りてきいひんかってんで。亀は竜宮城に帰つてから、えらいおこられてん。ひらめは、二度と川にもどらしてもらへんかってんで。

⑦ 水間峠の地蔵

資料 (1)

むかし、堺の漁師さんらが夜に魚とつてたら、東のほうからびかびかつと光がさしてきてん。それがえらい明るうて、漁がでけへんねんで。しかも毎晩続いたから、漁師さんらは困つてしもつて、どこで何が光つてるか探しに、光をたどつて行つてんで。ほしたら、水間峠まで来てしもてん。水間峠のてっぺんに、小さいお地蔵さんがあつて、それが光つてんで。

堺の漁師さんらは、水間の村の人らに、

「頼むさかい、お地蔵さん下ろしてくれ。お地蔵さんの光が堺の海までとどいて、漁がでけへんのや。そのかわり、毎年魚持ってくるさかい」

いうて、頼んだんや。

水間の人らが、お地蔵さんをずつと下に下ろしたら、堺でも漁がでけるようになってんで。堺の人らは、毎年水間にイワシを持っていきたいことや。

⑧ 天狗の石合戦

資料 (1)、(4)

むかし、神野山の天狗が、青葉山の天狗をからこうて、えらい怒らしたんや。ほんで、けんかになつて石の投げ合いしてん。

青葉山の天狗は、ごつたい石やら草を、なんぼでもぼーんぼーん神野山に向けて放つたんや。そしたら、その石がたまつて鍋倉ができてんで。

神野山の天狗は、弱いふりして、あんまり石投げへんかってん。そしたらな、青葉山は石や草がなくなつて、はげ山になつてしもつてんで。ほんで、神野山は頂上に草がよけ生えたあんなん。

⑨ 園生姫の話

資料 (2)

むかし、後醍醐天皇が、京の都を追われて笠置の行在所に逃げてきたときのことや。園生姫いうきれいなお姫さんを連れてはってんで。敵が攻めてきて逃げる途中、お姫さん、家来にはぐれてしもつてん。

お姫さんは、山の中、なんにも食べんとひとり逃げたてな、森の中で倒れて起きあがれへんようになって。朝になつて、尾山の村の者が森へ薪とりにきて、お姫さん見つけてん。ほんで連れて帰つて介抱したんやて。お姫さんは尾山で暮らすことにしたんや。

ある日、お姫さんが天神さんにお参りに行つたら、梅の木に実がすずなりになつてんで。お姫さんは、梅の実とつて帰つて、炭火で一晩中いぶつて天日に干して、まっ黒な梅を作らはってんで。ほんで、

「これは烏梅いうて染め物の薬です。京へ持つて行って売つたらよろし」いわはんねん。村の者は、

「こんな黒い梅、売れんのやろつか」いいもつて、教えてもろたとおりに烏梅をよけ作つて京の都へ持つていつたんや。そしたら、えらい高い値段で売れてんで。村の人はびっくりしてん。

「えらいこつちや」

「こんな黒い梅、こんなえらいもんが高う売れるぞ」

それからは、尾山でも、隣村でも、山に梅の木よけ植えるようになってん。これが、月ヶ瀬梅林や。ほんで、尾山のもんが園生姫を助けた森が「園生の森」で、ええ温泉がわいたあんなん。